



TITLE:

## 第46回研究部員会議議事録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

第46回研究部員会議議事録. 物性研究 1969, 12(3): 206-223

ISSUE DATE:

1969-06-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87166>

RIGHT:

## 第46回研究部員会議議事録

1969年2月27日・28日

於 小 講 義 室

議 長 山 田 英 二

金森順次郎

出席者	運営委員	11名	} 37名
	研究部員	17名	
	所 員	9名	
	オブザーバー	13名 (内 研究計画提案者11名)	

議 題

1. 議長団報告
2. 基 研 報 告
3. 新研究部員承認
4. 外 人 招 聘
5. プログレス (サプルメントの性格等) について
6. 所員の外国出張について
7. 昭和44年度研究計画について

— インフォーマル・ミーティング —

8. 研究計画決定
9. 宿舎について
10. 基研のあり方 (大学問題に関連して)
11. 科研費について
12. 物研連委員選出規定について
13. 原子核将来計画

資 料 (物性研究 Vol. 12 No. 1 参照)

1. 研究計画応募一覧
2. 物研連委員候補選出規定について

資 料

3. 物研連委員選挙人の投票について

4. 科学研究費に関するある問題点

(谷川安孝氏が「素研」に投稿されたものを「素研」編集長から  
本人の了承を得て資料にさせていただいた。)

1. 議長団報告

12月に20万円, 1月に30万円の員等旅費の追加配当があった。前者については12月の協議員会で, 後期研究計画決定のとき, 待機になっていた計画に次のように配分した。

研 究 テ ー マ	要 求 額	決 定 額
原子核間相互作用	15万円	5万円
宇宙論と銀河の進化	20万円	15万円

後者については, 今年度研究計画を提案しているグループに追加募集し, 2月3日の研究部員会議々長団と所員の合同会議で以下のように決定した。決定の基準として2月と6月の研究計画決定の時, 要求額から削られた分の半分を上限とし, 今回の要求額がそれ以下のものは要求通り認めることにした。残額は2月末の研究部員会議で来年度の研究計画決定のときあわせて配分することにした。

研 究 テ ー マ	要 求 額	決 定 額
非周期系の基礎物性	2.4万円	2.4万円
蛋白質の3次構造の決定	2.0	2.0
素粒子の時空記述	3.0	3.0
原子核に於る $\alpha$ 的4粒子相関と分子構造	5.0	0
火の玉	7.0	2.5
S行列と対称性	6.0	6.0
宇宙論と銀河の進化	4.0	2.5
不規則系における電子状態	3.0	0
素粒子の弱い相互作用	7.0	0
計	39.4万円	18.4万円

## 2. 基研報告

資 料

湯川

- 。 アトム型研究員として次の方が来られた。(9月以降)

西田修三(阪大基礎工D2)3ヶ月 和田正信(日大理工講師)1ヶ月

川部 健(岡山大理助手)1ヶ月 金子孝夫(名城大理工講師)1ヶ月

斎藤基彦(東大理 D3)1ヶ月 山本浩史(福井大工助教授)2ヶ月

福山秀敏(東大理 D2)1ヶ月 品田正樹(電通大 助教授)2ヶ月

今年は若い人が多くみえたが, space capacity は一杯というところだ。

- 。 外人招聘

P. Dean (Nat. Phys. Lab.)

E. Montroll (Univ. Rochester)

H. Fröhlich (Univ. Liverpool)

E. Lieb (M. I. T.)

P. Mazur (Inst. Lorentz)

R. J. Rubin (N. B. S.)

C. M. G. Kattes (Univ. Campinas)

W. Lee (Columbia Univ.)

(F. Gutmann 3月後半 半月予定)

玉垣 15周年シンポジウムの記録の出版が少し遅れているが, 原稿はほぼそろった。討論の部分の発言者による訂正もほぼ終りになる。近いうちに印刷所にまわす。あと2ヶ月位でできると思う。

シンポジウムの開かれるに至った経過を前書きにし, 式典部分へ入る計画, プログレスから発行し1,000部作る。基研で半分程度買上げ, シンポジウムに招待した人へ贈りたい。1部800円程度。

## 3. 新研究部員承認

### ◎ 素粒子原子核関係(改選10名)

- |                 |                   |
|-----------------|-------------------|
| ① 戸田 東 (東北大 理)  | (注)               |
| ② 木下 紀正 (九 大 理) | 1. 谷川氏と高田氏が同得票数で  |
| ③ 田中 正 (京 大 理)  | あったので, くじびきの結果,   |
| ④ 小出 義夫 (広 大 理) | 谷川氏の当選となった。       |
| ⑤ 長崎 正幸 (立 大 理) | 2. 開票を行なったS.G事務局よ |
| ⑥ 横山 寛一 (広大理論研) | り受領者数と投票数にくいちが    |
| ⑦ 山口 嘉夫 (東 大 理) | いがあった旨報告があったが,    |

資 料

- ⑧ 森 田 正 人 (阪 大 理)
- ⑨ 室 田 敏 行 (北 大 理)
- ⑩ 谷 川 安 孝 (神 戸 大 理)

---

- 次点10 高 田 健 次 郎 (九 大 理)
- 12 紺 野 公 明 (日 大 理 工)
- 13 古 市 進 (立 大 理)

◎ 物性論関係 (改選5名)

- ① 森 肇 (九 大 理)
- ② 糟 谷 忠 雄 (東 北 大 理)
- ③ 近 藤 淳 (電 試 田 無)
- ④ 森 田 章 (東 北 大 理)
- ⑤ 芳 田 奎 (東 大 物 性 研)

---

- 次<sub>1</sub> 6 中 村 伝 (阪 大 基 礎 工)
- 次<sub>2</sub> 6 長 谷 川 洋 (京 大 理)

今回は受領証に署名もれがあったものと解して、今回の投票を有効とした。今後、受領書がダブル・チェックの役の果すよう注意したい。

3. 物性論関係の次点が、2人同得票数のため、くじびきの結果、中村氏が次点の1ということになった。

4. 外人招聘

H.A.Bethe	* 2ヶ月 (10, 11月)	原子核
R.MacWeeny	** 2ヶ月 (秋)	統計力学
A.J.F.Siegert	1ヶ月 (6月)	"
J.P.Elliott	1ヶ月 (4月下旬)	原子核
G.Börnir	*** a few months	素粒子
M.Barghini	**** 1ヶ月 9月下旬, 実験 (Bubble Chamber)	

夫々の人について説明があり議論した結果、不確定なところのある人は基研側に決定をまかせ、研究部員会議としては一応上記の通り認めた。3月26日の協議員会 (所員会) で検討した結果、以下のように決定した。

＊ 1ヶ月      ＊＊ その後辞退された      ＊＊＊ 6ヶ月

＊＊＊＊ 実験家で主に核研に滞在される為、理論の方で希望者が多いときは止めるかどうかについて検討したが、今回は認めることになった。

## 5. Progress (Supplement の性格等) について

牧 編集部では Supplement の編集方針と編集手続きについて次のような考え方をまとめた。

Supplement は恒久的あるいは一時的に日本に在住する物理学研究者による寄稿に重点をおいて、基礎物理学の種々の分野における発展を概観する為に原則として年 4 号（合計約 1,000 頁）発行される。通常各号はある特定のテーマに関するものとする。Supplement の中には色々な雑誌に発表された日本の物理学研究者の論文の翻刻及び基礎物理学研究所の年間計画に従って開かれたシンポジウムの簡単な報告を含む号もある。

即ち ① 日本の基礎物理の研究成果をまとめたもの。

② 基礎物理学研究所に於ける長期・短期の研究会の成果を系統的にまとめたもの。

③ Review articles の場合は著者の original の仕事を中心にしてまとめたもの。

を基本的な方針として編集される。年間の企画編集は Advisory Council で行なわれる。

Supplement への掲載希望がある時は Editor に前もって論文の内容、長さ、原稿のできあがる時期について申し出ることをたてまえる。編集部が原稿を受取った後の論文の取扱いがレフェリーの問題を除けばプロGRESS本誌に準ずる。

これについて御意見をうけたまわりたい。

また、軍関係に acknowledge したり、軍機関所属者の投稿についての扱い方の原則を議論していただきたい。

湯川 初期には、日本の仕事を主にとりあげるということだったが、まとまった長編論文を随時とりあげる等、次第に広い解釈がされるようになった。基研の研究計画につながったものにとりあげる等の原則を作った方がやりやすい。又、長編の論文をサプルメントにまわすのは正当化できないと思う。

44年度サプルメントについて、計画や御希望があれば出していただ

資 料

きたい。

松田 物性で話題になっているものは次のようなもの。

1. s-d exchange interaction
2. Second-order Phase Transition
3. Statistical Physics of Randon System
4. Some Topics in the Theory of Lattice Dynamics
5. Theory of Exciton (仮題)

牧 素粒子関係では次のようなものが話題に上っている。

1. Structure of Elementary Particles II
2. B-S equation 関係
3. 火の玉
4. Nuclear Matter

湯川 ここにあげられているものは内容としてサプルメントの性格上問題はない。むしろ来年度にこのうちどれだけが完成するかという时期的な問題があるのではないか。

山田 B-S と 火の玉は十分できるだろう。物性も少くとも1つはできるようにしていただきたい。

松田 4番目は力を入れればたぶんできると思う。関係者と相談し、発行にこぎつけたい。

湯川 6月に開く予定の Advisory Council のときに44年度の計画が決まるようにしたい。

松田 サプルメントの性格にあうものが、その年度にない場合、外人の論文も含まれるような個人持ち込みのレビューも取り上げてよいのか、それとも欠版のままいくべきか。

山田 これは case by case で考えた方がよい。厳密なことを決めても、かえってあとで困ると思う。

松田 最初に牧さんの言われた優先順位を認めていただければ結構です。

金森 その方針をここで認めることにします。次に軍関係の議題に移ります。  
(議長)

牧 今まで慣例的に軍関係のものは断ってきたが、これを今少し、はつき

りした原則としてはどうかと考えている。

湯川 今までは軍関係への Acknowledgment があるときなど、その削除を申し入れ、その結果投稿をとり下げる等、いろいろの場合があったが個別に解決してきた。

玉垣 物理学会の Journal はどうなっているか。

小沼 一昨年、臨時総会で内外を問わず、軍とは一切の協力関係をもたないという決議をし、一年がかりでこの決議を実施するための方針を討議してきた。Journal の論文発表についてはまだ最終的な結論に達していないが、軍機関の Project 研究は認めないことがはっきりしている。

具体的にいうと

1. 軍との contract number のついているものは、だめという考えであり。
2. 軍関係機関への acknowledgment のついたものや、たとえば防衛大学校所属の人の個人としての研究については意見がわかれていて決っていない。

田中 Progress で原則として軍関係のものは採用しないとき、それを投稿規定等に明記するのか。

湯川 むしろ投稿のあったとき、編集部則の方針を伝えてお返しするという扱いになる。その方針は軍関係に acknowledgement のある論文、軍機関所属者の論文はことわるということである。

金森 研究部員会議としては、この編集方針を認めることにします。

## 6. 所員の外国出張について

中野 所員で長期間外国に行きたい人が出てきたとき、その間

1. 休職にして後任をとるか
2. 任期をどうするか

について議論して欲しい。

湯川 初期には半年になると休職にして後任を採用し、帰国されたら、他からポストを借りてくる。という自転車操業をしていた。



## 資 料

一年～一年半のときが問題で、それ以上は休職、それ以下はそのままということになるだろう。任期は今までは外国滞在中は数えないことになっていた。

未包 就職難ということは帰って来られたとき、就職口がないということになり、ポストを捜するに運営委員の方々に御苦勞をおかけすることになる。

大槻・磯 難しいだろうが、自転車操業をして欲しい。

山田 基研にその後のポストを捜すことを押しつけるのは良くない。

牧 1年以上のときは、「その期間」と限ったアトム型等を採用してはどうか。実際は1年と思って行ってそれが延びるということが多いので、staffとして採用するには手続上困難な点がある。

湯川 基研は以前には半年で休職にしていたが、京大全体としては、1年は休職にしないのが慣行である。半年以内に休職にすることはできない。

山田 今、就職難というのは確かなので1年の期限つきでも応募があると思う。1年より長くなることが分った時点で公募し、後任を発令して帰朝されるまで1年以上あるときは休職にしてはどうか。

田中 その場合、奨学生やアトム型のような形で採用するのか。

湯川 やはり基研の staff として採用したい。

山田 任期をはっきりして採用し、その人の duty 等は他の所員がそのことを考慮され、善処していただきたい。

## 7. 昭和44年度研究計画について

研究員等旅費見込み	690万円
-----------	-------

研究部員会議等	110万円
---------	-------

自由研究費	30
-------	----

職員研修	5
------	---

旅費付談話会	10
--------	----

計	155万円
---	-------

研究会・アトム型予算	$690 - 155 = 535$ 万円
------------	----------------------

前期研究会・アトム型予算  $53.5 \times \frac{2}{3} = 35.6$  万円

{	前期研究計画応募	520.7 万円
	アトム型研究員応募	230 万円

短期間のアトム型研究員としての応募が多い，という報告があり，討論した結果，以下のように予算を配分した。

前期研究会予算	276 万円
“ アトム型予算	80 万円

時間が限られており研究計画の数が多いので，全体としての研究計画提案説明はやめ，素粒子論関係と物性関係に分かれ，informal meeting に入った。

座長 {	素粒子論関係	板 橋
	物性論関係	中 嶋

## 8. 研究計画決定

Informal meeting での討論に基いて座長と議長団で作られた予算原案が示され，討論の末，次表の如く決定した。

尚，研究会を開くときは，その開催をあらかじめ必ず各研究室に知らせるよう世話人に依頼することになった。

## 9. 宿舎について

小沼 以前から地上5階地下1階の宿舎への改築要求を出していたが，昨年11月，今年度中に建てられれば予算がつくことになり，現在工事を始めている。大きな建物を造ることに対する地元の反対が強く，結局地上4階地階なしで定員24名の宿舎ということで地元との了解がつき，工事が始まった。

6月末～7月始めに完成の予定。1階はサービス・エリア，2階以上は寝室（個室2つ，あとは2人部室）になる。

## 資 料

白川学舎と異なり大学所属の宿舎となるので、大学としての管理規定をどうするかという問題もある。

湯川 基研と数研と共同で申請した形となっているが、土地の提供も、地元との交渉もすべて基研側で解決してきた。数研もこのようないきさつは十分理解しておられると考えるが、利用方法については、両者の間で話し合いを進める。

事務長 宿舎として申請して通り、基研が管理することになるので、管理方法については規定を作らねばならない。

等、基研側から説明があったが、数研との話し合いの結果や管理規定などについては、6月の部員会議で承認を求めることになった。

### 10. 基研のあり方（大学問題に関連して）

湯川 最近京大でもいろいろ問題があり、拡大部局長会議がよく召集される。共同利用研の立場として、私自身はむしろ出席しない方が良く考えるが、京大全体との連帯もあるので、牧、松田の両氏に代理で出席していただいている。緊迫した事態がおこると本部からはできるだけ多くの教官が現場に行ってみ守っていてくれという要請がある。

これから先、大学はどうあるべきか、変化しつつある大学の中で共同利用研究所はどうあるべきかという重要な問題がある。

富田 京大では1月14日以来、寮問題をきっかけとして事態が深刻化した。（京大全体としての2月27日までの経過の説明 略）

理学部内では、化学教室70周年記念事業に対し、学生からこれが「政府の産学協同路線に乗る危険性を含む」という強い反対があり、これを撤回することになった。この計画の実施を以前承認した理学部協議会としては、これについての見解を声明として出した。

。現在、学部の中では教授・助教授からなる学部自治検討委員会で全学部的運営機関をどう作っていくか検討中である。

。物理では若い人の中で、若い研究者の地位、研究とは？ 教育とは？ について討論が行なわれている。

湯川 学生だけでなく、大学院生の増大が大きな問題を含んでおり、最近の

## 昭和44年度前期研究計画

	テーマ	代表者及び提案説明者	旅費(要求額)	校費(要求額)	時期	備考
長期研究計画	1 弱い相互作用と電磁相互作用の普遍性	山田勝美, °大坪久夫, 広岡正彦	18万円(25)万円	30万円(30)万円	11月頃	
	2 素粒子の弱い相互作用	°藤井寛治, 小沼通二, 中川昌美	19+ [11]* (40)		69年3月 70年1月	* S43年度予算でS44年3月に研究会を開く
	3 多体問題	沢田克郎, 守田敏雄, °長岡洋介	0 (80)			
	4 火の玉	藤本陽一, 長谷川俊一, °荻田直史	24 (30~35)		6月及び11月	研究計画が十分練られていないし、世話人間の連絡も徹底していない等の理由により研究計画を練り直して6月に再び提案されることを希望するという意見が多かった。
	5 素粒子の模型と構造	飯塚重五郎, 石田晋, 植原正行, 益川敏英 牧二郎	22 (30)			
短期研究計画	1 Veneziano Model	北門新作, 矢吹治一, 宮村修	13 (30)		4~5月	
	2 液体と固体はどう違うか	戸田盛和, 松原武生, 森肇, 松田博嗣	30 (30)	10(計)(10)	9月中旬	
	3 核構造	高木修二, 有馬朗人, 宇田川猛, °玉垣良三	10 (30)		10月中旬	一応10万円 keep するが後期に追加要求を出していただく。
	4 銀河中心核の構造と進化	藤本光昭, 中野武宣, 大谷浩, 田原博人	12 (14)	5(印)(5)	6月	
	5 素粒子の時空記述	湯川秀樹, 片山泰久, 田中正	0 (15)			時期的に後期のものなので次回再応募していただく。
	6 Resonanceと素粒子の複合性について	小出義夫, °小林昭三, 吉井博明	0 (20)			世話人から計画を練り直して後期に再応募するという申し出があった。
	7 Fundamental Ideasの検討	鈴木真彦, °坂東昌子	0 (25)			世話人から計画を練り直して後期に再応募するという申し出があった。
	8 素粒子の構造と高エネルギー素粒子反応	°坂東昌子, 松岡武夫, 井町昌弘	15 (20)		7月中旬	
	9 「励起子」の理論	長谷川洋, 福留秀雄, 武野正三	0 (15)			世話人から計画を練り直して後期に再応募するという申し出があった。
	10 若手研究者の現状と将来	°白藤忠彦, 松柳研一, 糸永憲, 舞原	20 (40)	10 (10)	8月1日~6日	
	11 基底及び励起状態に対する変分計算	°平田道紘		0 (10)		
	12 物性若手夏の学校	°内藤正美	5.6 (5.6)	30(印)(30)	8月上旬	印刷費は30万円を上限とし具体的な経費が決ってから6月の部員会で決定する。
モレキュラー型研究計画	1 非周期系の固有モードに関する数値実験	南栄 °堀淳一	10 (10)	3(計)(3)	4月1日~4月7日 6月30日~7月5日	
	2 金属強磁性体の体積磁歪	°勝木渥, 藤森啓安	7.6 (7.6)		4月下旬 9月上旬	
	3 低エネルギー及び高エネルギー領域までの核子-核子相互作用とその周辺の研究	金田博行, 喜久川政吉, °広重昇	10 (10)	10(計)(10) 15(費)(15)		
	4 f-p shell核のHartree Fock Methodによる研究	°末包昌太, 佐々木潔, 飯塚敏, 田沢輝武, 由良	10 (10)	5(計)(5)		
	5 原子核間相互作用	°玉垣良三, 岡井末二, 斎藤栄, 和田正信, 安野愈	10 (10)			
	6 B-S方程式による核力の研究	°室田敏行, 伊藤仁之, 田中富士男, 野田松太郎	6 (15)	20(計)(20)		
	7 蛋白質の立体構造	°大井竜夫, 西川健, 斎藤信彦, 磯貝芳徳, 寺本英, 尾崎正明	5 (5)	50(計)(50)		
	8 [Hadrons ~ U baryons ~ Leptons]	村山昭浩, 紺野公明, 中村勝也, °小出義夫, 勝矢光昭	4 (4)		5月	
	9 非周期系の函数論と数値実験	°米沢富美子, 長谷川洋, 中村充伸, 小山愛一郎 本間静夫	4.5 (4.5)	20(計)(20)		
	10 秩序・無秩序現象の計算機実験	荻田直史, 上田頼, 松原武生, 松田博嗣, 米沢富美子		30(磁気テープ)(30)		
	計		255.7 (515.7 ~520.7)	238 (248)		

就職難にも端的にそれが現われている。若い研究者の研究条件が改善される必要がある。

富田 研究と教育が、どう調和し、矛盾しているかについてお話が伺えれば幸いです。

山田 短期的問題と長期的問題がある。前者ばかり考えていると本質的問題を見逃す。基研で短期的問題で困っておられることがあれば出していただきたい。なければ本質的な問題に入りたい。

牧 最近しばしば召集される拡大部局長会議は正規の審議機関ではなく、連絡機関なのに、総長は記者会見等では「拡大部局長会議の意見を聞いて対処する」と言われる。あくまで「意見を聞く」なのだが、そのような会議に出席を求められたとき、こちらの意見を発表するべきか否か難しい。

磯 評議会との関係は

湯川 大学の最高議決機関は評議会であるが、基研は評議会メンバーに入っていない。

玉垣 大学の民主化の方策として総長から大学問題懇談会を置くことが提案されている。教授・助教授のうちの若い人によって構成される。共同利用研究所は今まで実質的には、大学の枠を越えたようなこともやってきているので、それをこの際言うべきではないか。

田中 核研は深刻な事態を迎えた。東大の執行部の総辞職に伴って所長も辞任した。核研小委では共同利用研と大学との関係について「共同利用研究所は大学の自治を前提としてできたのだから、それに関係するものについては、タッチし、一大学の単なる運営については関係をもつべきでない。」という議論が行なわれた。

一般に教授会が、学部の責任を持つということは、身分によって責任が違ってくるが、基研の運営の責任を持つ研究部員は身分によらずに選出される点、注目すべきだ。

湯川 大学問題懇談会は世話人的なものだが、部員会の判断で出ない方が良くとなれば、出席をとりやめる。

山田 host university との関係はどういう基準で考えるか。

資料

牧 核特委で核研と東大の関係について決めたのは、相互尊重、相互不干渉の原則であり、共同利用研究所は全国の研究者の自治によって運営されるべきだということだ。

中村 日本の事情をよく知らないが、大学の問題は制度の事だけでは片付かないと思う。ドイツでは $\frac{1}{3}$ の権利で学生も運営に参加し、待遇もよく生活も恵まれているが、学生の不満は高い。社会が腐っていると考えているらしい。

大槻 古い形の評議会・教授会の出す答は対症療法的で、この形が悪いことは一般にも認められている。

基研は全国の研究者の意向を代表して京大に伝える能力を持っている。時間はかかってもそれをやって欲しい。

湯川 大学、学問の閉鎖性を取り去ることが、大学問題にも大きく影響すると思う。

牧 “腐っている”という意見が出たが、“研究者の自治”が果して腐っていないかと考えてみる必要がある。

末包 機構・学生救共に大学がマンモス化していることが大学の機能を麻痺させていると思う。現在の体制を変える前提での共同利用研のあり方を考えて欲しい。

又、教育と研究は、分離できないものであるのに、教官は研究の面のみ考えやすい。教育の面から見ることも必要ではないか。現在は教育といっても、とにかく後継者の養成にのみ熱心で、最近の研究に結びつけたものになる。

湯川 共同利用研究所が大学の自治の傘の中にあるのが良いかどうかにも確かに疑問だ。

中村 出身校で、助手・助教授・教授と昇任していくのでは、大学閉鎖性はなくなる。

都築 現在学問を進める上で大事な問題として

1. 新しいものを作る。
2. それを開発し豊かなものにする。
3. より広い範囲から新しいものが出る可能性を得る為、国民全体の

教育水準を上げる。

ということがあると思う。現在の学部やり方は、3番目の問題にはあわない。一般的な教育技術の発達が遅れている。又、物理に関していえば、学部を出て、大学院に入り、研究を始めるというのでは新しいものは出にくい。

位田 大学院のあり方について、自民党の文教制度委員会で、剣木試案等出ているが、東大では入試中止ということもあって緊迫感を持って受けとられている。

全国の研究者の集まる共同利用研究所でも、もっと考えたい。

山田 他にも多くの問題があるが、他の機会に reporter を決めて問題点を指摘したりして議論したい。

## 11. 科研費について

小林（稔） 昨年12月、学術会議から物理学会に科研費の審査委員の推薦依頼があった。物理学会では以前から「文部省や学審でなく、学術会議から依頼があれば推薦する」という態度を決めていたので、12月末、一応推薦した。学術会議からは「学術会議の意向が尊重されるであろう」ということで、文部省と合意に達したとの説明があった。推薦者数は1.5倍まで、とのことだったので、第2段2名（1名に対し）第1段18名（12名に対し）を推薦した。第2段審査委員は物理学会委員による投票で同票最高位の伊藤・小林を、第1段審査委員は伊藤・小林が特務委員にはかって決め、本人の了承を得る余裕もなく学術会議へ推薦した。

一方、今年1月の学術会議総会では、文部省との了解について釈然としない点があるから、その内容を文書で明らかにして欲しいという要望が会員から出され、会長は早急に出すと言われたが、まだ出ていない。

又、2月に学術会議の執行部と学審の代表が協議したとき学審から

① 審査委員の中に学長が5人入っているが、これは困る。

（各大学で機関研究の順位を決めることもあるから）

② 助手が審査委員になるのは困る。

という申し入れがあったが、学術会議としては、①については認め、各学協会へ考えなおしてもらうが、②は了承できないという態度をとった。2月17日の学術会議第4部会で疑問のある人は研究費委員に申し出て欲しいと、学術会議から審査員に推薦された人達に知らせるということになったが、それが来ておらず、文部省から審査依頼だけが来た。

先に述べた記録が出ていない事等審査を引きうけるについて、釈然としない。個人的には断りたいが、それが学術会議不審につながると困る。

山田 妥協案は審査委員の人選について学術会議の推薦を尊重するというのみだ。このような段階で学術会議から推薦されたが、文部省からの依頼は受けたくないという板挟みの心境はお気の毒だ。

高木 審査委員として推薦されても自分は引き受けないという意志は前から表明してあったので、物理学会からの推薦に対しては、委員長宛にお断わりした。文部省に対しても既に断った。理由は、総合研究班の班長になっていること。また多忙、ということである。

小林 私の場合、物理学会委員長であるため、断わることは、自分で推薦していて辞退することになる。

言い忘れたが、44年度は実験的にやってみる筈であるにもかかわらず、文部省からは2年間として審査委員を依頼してきているのは納得しにくい上、文部省はあくまで学審が科研費の審査を行なう立場をとっており、学審の専門委員である審査委員は学審の下請にすぎないなど、困る点が多い。

小川 第1段審査委員の依頼がきたが、私個人としては断りたい。その場合、結果的には“学会の不信”“学術会議の不信”につながる面もあることになると思う。又、科研費の推移を見るとき総合班のメンバーが増えているのに、逆に支給額が減少している。現在の審査方式では、このような根本的なことまで考えて審査できる自信もない。

山田 個人としての発言だが、学術会議会員の中にも、いろいろの考えの人



がある。いろいろの意味で研究者の代表だから、そのとられた態度に対するさまざまな批判の出ることはやむを得ない。

牧 谷川先生が素研の放談室に投稿された原稿“科研費に関するある問題点”（資料4参照）を了解を得て資料とした。要点は機関研究が必ずしも研究成果をあげるとは限らないのに、優遇されている。総合研究の金額を抜本的にふやすべきである、ということ。また、科研費の配分や運用にもっと研究者側の自主制を貫くべきこと等であったと思う。私の意見を言えば、小林・小川両氏にはこの際、審査委員をお引きうけいただきたいと思う。科研費配分は43年度より学審の手中に移ってしまった。事態がこのようになったことには学審の成立を大して批判せずにいた学術会議にも責任があると思う。学審の手中に移ったものを、実質的に我々の手中にとりもどすには科研費の在り方や配分等について、できるだけ実績をつみあげてゆく外ないと思う。去年の科研費配分は文部省が、いわば闇から闇へ行なったが、今年は一応学術会議や物理学会の中では、ガラス張りで進められている。大きく学審に譲ったとはいえ、実質的な内容を改革する努力を進めてゆくことが望ましい。物理学会が物研連の選出方法を改革しようとしているのもこの努力の一つであると思う。

## 12. 物理学研究連絡委員会委員推薦のための選挙規定について

物理学会の特務委員をしている小沼氏から資料2に沿って説明があった後以下の意見が出された。

山田 JSC会員をどうするかについて議論していただきたい。研連には最底一人連絡をいる意味で、委員長が幹事として会員が入るという規約があるだけ。

玉垣 学術会議の選挙に似ているが、選挙運動はどう考えておられるか。

小沼 別に決めない。

山田 分野はどうして決めたか。

小沼 会員数がほぼ1:1~1:2の比率になるように決めた。

1分野1,000~15,000人、昔からある区分を少し修正したもの

である。

山田 方々で議論して御意見を寄せられたい。

小沼 物研連は大事な委員会だから検討した上で御意見を物理学会委員長に出してもらいたい。

### 13. 原子核将来計画（総合事務局ニュース№22参照）

高木 昨年11月末、学審総会の「素研 $\frac{1}{4}$ 計画」が報道され、12月6日、7日の核特委で伏見氏（学審の学術研究体制委員）からこれについて説明があったが、はっきりしない点や納得できない点が少くない。

例えば

- ・ $\frac{1}{4}$ 縮少案の出た根拠

- ・JSCの科学研究5ケ年計画をどうみるか。

（その一部だけを取りあげ、しかも $\frac{1}{4}$ に縮少されている。素研の将来がはっきりしないなど。）

等である。

（これらについては2月2日付で茅会長あて検討小委から質問を含む申し入れを行ない、2月26日付で返答をもらったが、それには $\frac{1}{4}$ 縮少案は金額的には研究所関係予算の年間伸び率の枠内で、無理のないような配慮で考えた暫定的なものであること。又、素粒子研の体制について、この規模が著しく縮少されれば、再検討するといった $\frac{1}{4}$ 案をどう理解するかにあり、大きなものになるという見通しを持って進みたければ、小谷案をとるべきであろうという見解（茅会長個人の）等が含まれている。）

原子核研究者の各グループ・各地域で討論し、2月1日にシンポジウムを持った、3月12日には、物理的展望を得る為、原子核物理学の現状をふまえて将来を考える会を予定しており、3月中に核特委で案をまとめた上で4月の物理学会年会の時、全研究者の意向を聞くシンポジウムをしたい。

高木 学審の伏見専門委では、8 GeVの加速器を作り、附属設備として大型計算機や極低温実験室を作り、宇宙線による素粒子の研究をやれとい

うことらしい。

(この報告の後、質問を含めて種々の意見が出されたが、時間がない  
為打切りとなった。)

以 上

文責 研究部員会議 議長団

## 第47回基研運営委員会議事録

1969年3月1日

於 コロキウム室

議 長	湯 川 秀 樹				
出 席 者	田 中 一	中村誠太郎	中 嶋 貞 雄	朝永振一郎	
	小 川 修 三	高 木 修 二	碓 井 恒 丸	小 林 稔	
	松 原 武 生	井 上 健	牧 二 郎	松 田 博 嗣	
	玉 垣 良 三				
欠 席 者	久 保 亮 五	坂 田 昌 一	小 谷 正 雄		

### 1. 研究部員会議報告と承認

報告が行なわれ、以下のような補足意見が出されて承認された。

#### 。科研費について

朝永 私も、小林・小川両氏には審査委員に入っていただきたい。学術会議  
の役割が続いている限りは科研費の審査を投げ出すべきではないと考  
え、44年度1つの実験をやってみようと思った。

2年任期の問題についても学術会議に相談があったと思う。研究分野  
も分け方を変える可能性があるし、そうなると任期も変わってくとい  
うことまで学術会議では考えている。